

くまもと・わくわく基金（市民公益活動支援基金）
平成28年度助成事業公開プレゼンテーション議事録（要旨）

- 1 開催日時：平成28年3月24日（木） 9時30分～
- 2 開催場所：熊本市総合保健福祉センター ウェルパルクまもと1階大会議室
- 3 市民公益活動支援基金運営委員
 - ・出席者： 古賀 倫嗣 委員長（熊本大学教育学部教授）
佐藤 和弘 副委員長（株式会社 地域総研 代表取締役）
越地 真一郎 委員（地域づくりアドバイザー）
中島 久美子 委員（特定非営利活動法人 熊本県子ども劇場連絡会 理事長）
松枝 清美 委員（公募市民）
田中 俊実 委員（市民局次長）
 - ・欠席者： 田上 聖子 委員（観光文化交流局次長）
- 4 配布資料
 - 資料1 平成28年度助成事業公開プレゼンテーション（次第）
 - 資料2 分野指定助成事業プレゼンテーション発表団体一覧
- 5 プレゼンテーション（団体発表5分、質疑応答5分の計10分）

(1) 保健・医療・福祉の分野

(H-1) NPO 法人 熊本高齢社会活性化研究センター

【事業名】高齢者のための介護講座

<質疑応答>

・(佐藤副委員長) 行政レベルで取り組むべき、非常に公益性の高い計画であると感心している。在宅介護の中で介護者自身が力を付けることはとても重要な問題だと思うが、このような活動を続けていくため、事業後にどのような効果があったのかを検証する計画があれば教えて欲しい。

(団体) あくまでもNPOが自主的にやっているため、法的な資格はないが、この研修を受けた方に修了証を差し上げ、さらに本人が希望すれば、当NPOの会員に登録をして頂く。その後、その人がどのような活動を自分なりにやっているのか、この講座がどのような役割になったのかということについて、仲間の一員として行動し、確認していく。

・(越地委員) この研修は一般の人が気楽に参加できるものなのか。それとも、ややプロフェッショナルな要素を意識しているものなのか。また、非常に大きなテーマに立ち向かうものであるため、この10日間に限らず年間としていろんな構想を持っているのか。当事業に対して、一般の人を含めどのくらい

の人を集めたいと思っているのかについて教えて欲しい。

(団体) 最初の質問についてだが、看護師の資格を有している方を対象にしたプロフェッショナルな講座は看護協会で行っているため、当団体では資格を持っていないアマチュアの方を対象にしてやりたいと思っている。活動団体にはシルバー人材センターやさわやか長寿財団があるが、そういう方々と一緒に活動をやってきた中で「保健 医療福祉分野に関しては、どうしても自分達で活動ができない」と聞いている。当団体にはそういった方の活動との谷間を埋めるような保健医療福祉の専門があるので、専門性に関してはそういった形で支援したいと考えている。

2つ目の質問だが、こうした活動を継続して実施し、当団体の活動の重要な柱にしていきたいと考えている。昨年試験的に実施したが、やはりどうしても10日間程の期間を拘束してしまうことになるため、対象者が地域のリーダーに限定される傾向がある。そういった人々から「もっと気楽に参加できるような形にしてほしい」という参考意見を伺い、可能であれば30名ないし50名ぐらいの規模で一回のコースをやれたらと希望している。

(H-2) 特定非営利活動法人 優里の会

【事業名】「里親制度の普及啓発と支援を強化するための事業」

<質疑応答>

- ・(中島委員) 里親についての理解を広げていくために今回の講演会を企画したとのことだが、チラシの内容が里親制度についての広報なのか、それとも講演会についてのチラシなのか分からなかった。これからこういった形で活動について知らせていくのかと、講演会の広報手段について教えて頂きたい。

(団体) チラシは、これまで講演会を主にやってきたので、そういった講演会の参加を呼び掛けるものにした。また、区民祭りでは展示パネル等を見に来られた方に資料を差し上げているが、このチラシはそういった資料にも使っていこうと考えている。

- ・(田中委員) 大変重要な取り組みであると思いながらお聞きしていた。例えば、数値的なもので「このくらいまで達成したい」といったこの取り組みの目標、成果はあるか。数値的なものでいうと参加者の数というものがあると思うが、実際の活用事例や数値目標があれば教えて頂きたい。

(団体) 講演会に関しては、だいたい100名程度を目標と考えている。区民祭りは、不特定多数の方が参加して見に来られ、そこでミニ講演会というのを実施している。また、熊本市から里親座談会という事業を受託しているが、これに毎回10名弱ぐらいの方が参加されるため、それをもう少し増やして20名ぐらいにしていきたい。

- ・(佐藤副委員長) 先程の説明の中に、里親が必要な子どもたちが熊本には約800名おり、その内9割ぐらいが施設にいとあったが、全国的に見て熊本は高い位置なのか、低い位置なのか。熊本の現状を教えて欲しい。

(団体) 里親委託率は、全国平均が16.7%であり、熊本は10%前後である。そのため、どちらか

という都道府県の中では下に位置している。

- ・(佐藤副委員長) では、なぜ低いのか。

(団体) それについてはいろいろあるが、良い言い方をすれば、熊本県内には15ヶ所の児童施設があり、社会的養護が必要な子ども達を支援する施設が充実しているため、里親に行くことが少なかったということが考えられる。また、私は児童相談所に勤務した経験があるが、里親に子どもを預けることを実親にお話しすると、他の親に自分の子どもが取られるという意識がどうしても出てきてしまう。「施設に預けるのはしょうがないけど、他の里親に預けるのはちょっと駄目だ」ということを言われた。そのように実親への説得のハードルが高かったため委託が進まなかったのだと思う。

(H-3) NPO 法人 でんでん虫の会

【事業名】ひとり暮らしの「居場所づくり」事業

<質疑応答>

- ・(古賀委員長) 本市でこの問題に取り組むにあたって一番大変なことや、壁に感じたり、このあたりが難しい課題だと感じているような、事業を推進する上での問題意識があれば教えて頂きたい。

(団体) 現在、あいぼ一とお借りして5年が経ち、広がりを感じている。2月に講師として藤田孝典氏にお越し頂き、日本の社会には、居場所をなくし、生きがいをなくして立ち去る方が多くなってきているということもわかってきた。その居場所づくりを当団体は行っているが、それを少しでも知っていただきたい。また、民生委員や支援者とともに一生懸命やっているが、一人暮らしの人の中には、外に出られず卑屈になってしまう人もおり、そういう方たちに当団体の活動を知ってもらい、一人暮らしで困っている方が少なくなるように、孤独死がなくなるように、関係者と協力して活動していくべきじゃないかと思っている。しかし、それにはやはりそれなりに運営経費がかかり、すべてボランティアでやっているため、そこが困っている。

- ・(佐藤副委員長) これまでの活動の中から居場所づくりのための趣味活動の重要性が分かってきた、そしてそれに対する学習 会費が必要だということだが、一人一人の趣味が違ったりするが、それをどの様に支えていく計画を持っているのか。

(団体) 今まで、カラオケやスポーツなど、多くの方が携わる趣味を実施してきたが、これからは皆さんがどんなことを趣味としたいか、それによって外に出て交流できるか、ということを中心に心掛けてやって行きたいと思っている。

- ・(佐藤副委員長) NPO 活動としての事業、活動自体の目的については非常に敬意を表しているが、具体的にどのような支援が必要なのかということところが事業計画書の中からはわからなかった。それが市民活動についての学習会を行うということだったので、もう少しそこについて説明して頂きたい。

(団体) でんでん虫の会は「なんでんかんでん」とは言っているが、当団体だけですべてをカバーする

ことは難しい。ただ、みんなで集まるおしゃべり会や学習会が居場所づくりの一つのきっかけとなることが大事だと思っている。例えば、公民館で活動をされているなら、そこから講師を選んで、ちょっとでも興味があるなということ繋がりていく。あいぽーとでの学習会などでいろんな人と繋がっていきことが大事だと思っている。

- ・(越地委員) 一人暮らしの方は、主にどんな方が多いのか。これは行政も積極的に取り組むべき問題ではないかと思うが、行政の役割と貴団体の役割の違いはどこにあるのか。

(団体) 先程申し上げた通り、最初は男性の方が多かったが、現在では女性の方も多くなり、20代から80代まで男女問わず会員がいる。高齢者のサービス、障がい者のサービスというのは制度で保障されているが、そこには隙間があり、当団体はその隙間を繋いでいく。そしていろんな人が世代を超えて集まれる場所であることが大事なのかなと思う。実際行政に相談すると、一人暮らしだと予告死がないということなので、その辺をお手伝いできたらと思う。

(2) 環境の分野

(K-1) 熊本の大気汚染を考える会

【事業名】熊本の大気汚染測定運動を通して郷土の環境保全を図る活動

<質疑応答>

- ・(中島委員) 大気汚染は重要な問題であり、大変公益的な活動をされていると思う。最近会員数がとても減ったとあったが、その要因を一つお聞きしたい。また、これからどのくらい会員を増やしていきたいのか、目標数値があれば教えて頂きたい。

(団体) 多いときは80名くらいいた。教育委員会の先生に「客観的なデータを取りたい」とお願いして各小学校の正門前を測定したこともあるが、なかなか新会員を増やす活動ができていない。会員が皆高齢になり「測定ができないから引退させて欲しい」という話もあった。運営委員自体も85歳になる前会長を中心に高齢化していて、関心のある若者も多いと思うものの、そこにどうやって「こういう活動をしていますよ」、「一緒にボランティア活動しませんか」と呼びかけていくべきかということが当団体の課題である。その取組みとして、環境フェアや講演会活動で会員募集のチラシを配布したり、阿蘇や菊池などのきれいな空気をいかに次の子ども達に引き継ぐか、それがいかに大事な事かということをもっと市民の皆さまにもっと伝えて、仲間を増やして活動を広げていきたいと、できたらまた80名くらいまで増やしていきたいと考えている。

- ・(田中委員) 資料の期待される効果のところ、「自分でできる大気汚染対策」という記載がある。大気汚染対策というと、例えば、個人ではマイカー運動などを思い浮かべるが、その中で小中学校、子ども達を対象にした自分にできる大気汚染対策について、こういった広がり期待されているのか。

(団体) 十数年前、画図小学校の3年生の担任の先生を通じて、全3年生80名に話をする機会を得た。その際、実際に計測カプセルを使って自分の測りたいところを測ってもらい、それを回収して結果を返し、感想文を書いてもらった。その時に「僕の家でも、夕ご飯を食べながら『江津湖の水が汚れるの

はわかるけど、空気も汚れるということを知った。その原因は車だ。だから、僕たち家族はできるだけ車を使わずに、公共交通機関や自転車を使い、歩いて行こう』ということをお話ししました。」という感想文をいただいて、純粋な子ども達に理解してもらうことはとても大切なことだと思った。なので、もう一度小学生に向けた取組みが出来ないかと、この活動を通して子ども達へのわかりやすい話をしていけたらと考えている。

- ・(佐藤副委員長) 長年の活動に大変敬意を表す。こういった環境問題の実証実験を通して、具体的にやってもらった蓄積を社会活動につなげるには、もっと行政との連携が必要だと思う。今後もしたら行政を取り込めるのか、そういったいいアイデアを我々も考えなければならぬところ。ぜひ今後も活動に取り組んでいただきたい。

(K-2) 特定非営利活動法人 九州環境サポートセンター

【事業名】 くまもと一斉環境アクション！

<質疑応答>

- ・(佐藤副委員長) 熊本市内 20 カ所でやるため 20 回だと思うが、具体的に、いつ、どこで、どんなふう
に作業するのかということが記載されていないため、評価のしようがない。特に、イベント型の野外
活動になると天気にも左右されるが、そういったときの考え方を教えて頂きたい。

(団体) 先程の関連図等でも説明させていただいたが、皆さんが一斉に同じ活動をするのはクリーン
アップだけで、それとあわせて各自が日頃からされている活動を行う。環境団体であれば、環境保全の
活動だったり、自然教育であったりするが、それ以外に、散歩をして自然を楽しむ、季節を感じたり
して散歩を楽しむ、お子さんたちに本を読まれて自然教育をするなど、そういった活動にプラスして
クリーンアップを共通でやっていく。報告会では、各自の活動とともにクリーンアップをされたごみの
量を報告していただくことで、一緒に熊本をきれいにしたという共感と、自分たちの活動をみんなに
知ってもらい、他の団体はどういった活動をしていたのか、どのように熊本の自然を感じ、未来につ
いて考えたのかということ共有していただく、そういった場の提供を考えている。

また、天気などにも左右される野外での活動等もあるが、そのためにゴールデンウィークから 7 月の
末までと期間を長く設けさせていただいている。

- ・(佐藤副委員長) 熊本市内 20 カ所というのは、もう決まっているのか。

(団体) いいえ、現在当団体の会員が九州で 66 団体あるが、熊本市内だけになると 10 団体程度になる。
その会員と個人の方を含めて 20 団体くらいから初年度を始めたいと思っている。

- ・(古賀委員長) 今回の提案というのは、「環境や自然に関心のある団体等のネットワークを図る」という
ところが新しい特徴だと思うが、そういった団体は 1 つ 1 つがグループであるせいか、一般的な団体
以上に思いが非常に強い。そういった、それぞれの活動実績を持っている団体をどういった形でネット
ワーク化していくかのプロセス、どういった働きかけをしていくのかという点について、もう少し 具
体的な説明をしていただくとありがたい。

(団体) 長年環境団体と交流を行ってきて、皆さんの関係を持ちたいという思いは本当に強いのだが、それぞれが問題を抱えている。高齢者の問題や資金がないなど、そういった話を聞くうちに、まずはお互いがどんな活動をしているのか知り合う機会が必要であり、自分の活動も大事だが「他の団体の活動について知ることで、こう見えることがあるんだ」、「こういう拾い方があるんだ」とお互いに話を聞き、お互いを認め合いながら繋がっていくことを、エコライフカフェによって感じている。それでもやはり、毎年エコライフカフェ等をやっても自分の活動に精一杯でなかなか参加されないので、そういう機会を、ゴミ拾いという誰もが取り組める、その場でできるような活動と組み合わせることによって、活動する機会をつくり、活動報告会によって1つの同じような行動を元にそれぞれの活動について聞き合っ、いろんな活動をしている人がまだいるんだということを知ってもらいたい。それによって「ここここは協力できるのではないか」といった繋がりになると、さらに力が増し、熊本がまとまる形になるのではないかと思う。

(3) 文化・芸術・スポーツ・国際協力の分野

(B-1) NPO 法人ディスカバリーくまもとボランティアの会

【事業名】外国人から見た日本の観光についての講演開催事業

<質疑応答>

- ・(古賀委員長) 講師料が 30 万円であり、今回の助成希望額が 24 万円である。助成額を上回る講師料を払うという根拠をもう少し説明していただきたい。

(団体) この講師は、いままで誰もが気づけなかったような視点からズバズバと、日本の観光、一国の在り方、あるいは各地域がどのように観光をもっと盛り上げていくかということ非常に面白い観点から述べられており、講演を聞いた市民にも「目から鱗」といった効果があるのではないかと思う。その講師にぜひ来て欲しいという思いがあるため、本来であればもっと高い謝金が必要な方だが、当団体の熱意によって詳しく説明をして依頼をしている。また、この資料では説明していなかったが、会場に寺院を想定しており、彼が日本の神社や伝統的な文化財についてとても詳しい方なので、そういったところから彼自身の気持ちを動かせたらと考えている。

それから、講師の候補としては3人を想定しており、その3人とも日本の観光についてかなり詳しく、特異な視点から述べられている。

- ・(古賀委員長) 確認だが、3人で30万円か。

(団体) いいえ、あくまで1人で30万円。来年の3月までに1人決定する。

- ・(越地委員) 著名な方で1回だけ、印象深い講演会を開こうというのが今回の手法だが、一方で「地域の人に国際交流の目を」という事を言っておられたが、形は小さくても各所で複数開催するなどの選択肢は考えていないのか。

(団体) それだと今回想定する講演者の日程を押さえることが厳しいので、1回だけの講演を考えている。

そのかわり各地域の人を巻き込んでいく。熊本城の他にあるすばらしい史跡、宝を地元の人たちはよく知っているが、なかなか世界に発信できていない。この講演者も名前ぐらいは聞いているかもしれないが、実際に行ったことがないのではないかと思うので、ぜひ地域の人たちと一緒に協力して講演会を1回でやろうと思った。もちろん、彼が興味を持ってもう1回やることになる可能性もある。

また、これは教育ということで子どもたちを巻き込んでいきたいとも考えている。講演自体は小学校1, 2年生には難しいかもしれないが、親と一緒に来ることは構わないし、また、この講演を開催するまでの間に、各地域について学び、小学校、中学校にも広げていきたいと思っている。

- ・(中島委員) とてもわくわくするような話で、熊本の魅力をもっといろんな方に知って頂けるといいなと思うが、200名という人数の募集でとてももったいないなと思う。何かそのあたりの広がりが見える形があるといいなと思っていた。

(団体) もちろん、本当は500人ぐらいを対象に開催したいと思っているが、彼のスケジュールと会場の問題がうまくマッチしないといけないので、今のところ一応200人を目処にやっている。本当は500人、800人ぐらいに来てほしいと思っている。そのぐらいの価値のある方である。

(4) 環境の分野

(M-1) 特定非営利活動法人 熊本技術士の会

【事業名】 坪井川遊水池の減災対策に資する有効活用事業

<質疑応答>

- ・(佐藤副委員長) こういったボランティア活動に技術士会として取り組まれることに対して、非常に敬意を表したい。公園整備に関わるようなことだと思うのだが、遊水池であるがゆえに、例えば洪水機能として設定してある場合、増水した場合は、せっかく芝生にしても、そこがまた水に浸かってしまって駄目になるということはないだろうか懸念している。その場合の公園としての維持管理になると、またもう一回芝生を植え替える必要が出てくるかと思うが、芝生広場として整備する目的に沿うのか。

(団体) この遊水池の左岸にちょっとした洪水に浸からないところがあり、そこが県民に開放された公園になっている。今回計画しているところは、場合によっては数年に1回ぐらいは浸かるといったところだが、もしも浸かったとしても、水が引き、そのまま洗浄を行うと、芝生がすぐ枯れるというような状況にはならない。そのためには水の引きを良くする必要があるが、別のところだが、水引きが良くなるよう1週間ほど前からボランティアによる排水路整備を進めている。そのようになるべく芝生広場が維持できるような対策を講じていきたいと思っており、また、そういったところに洪水の後の維持管理を積極的にすることによって、遊水池の保全を進めていくということも目的の一つだと思っている。

- ・(佐藤副委員長) そうすると、この場所が遊水池の中でも排水条件などの絡みで一番適しているということか。

(団体) ここは洪水の関係でいうと、計算上 10 年に 1 回しか水が溢れない場所であり、もともと低いところにあるためゲートボール等ができる場所の整備を想定していたが、それには地盤が軟らかく適していなかった。そのため、地盤がもう少し高いところを選んで芝生を植えようと、いま地元で暗渠排水等をして芝が根付くような段取りをしている。

- ・(古賀委員長) すると、この事業が採択された場合、工事をした後の維持管理については地元の団体がきちんとその役割を果たすということか。

(団体) 地元はもちろん、広く市民の方に呼びかけていきたいと思っている。今回の場合、基本的な管理者は熊本県になるが、受益者は熊本市民であるため、もちろんこの地域の方々には加勢されると思うが、広く地域以外の方々にも呼びかけて維持管理を進めていきたい。

また、周りにずっと堤防があり、その遊水池の堤防が約 600mか 700mあるが、そこを花公園として管理して 5 年になる。もうずいぶん綺麗になった。

- ・(田中委員) 本市だけではないが、いろいろな地域課題の中で、公園や共有地などの荒れというのはますます多くなってきているのではないかと。今まで地域の方たちがやっていたところが、地域の担い手不足や高齢化が進み、こういったところがどんどん増えていく中で、非常に素晴らしい取り組みだと思ってお聞きした。

今回は坪井川ということだが、会として今後どのような技術的な支援を考えているのか。

(団体) 今回は坪井川ということで支援箇所を絞り、尚かつ坪井川のなかでも一番北側のみであるが、坪井川の遊水池地区全体が広いため、他の地域についてもどのように管理するのか、坪井川の河川全体をどうするのか、また坪井川以外の河川や他の公園などのいろいろな公共施設などについても、行政に任せるだけでなく、どのように維持管理していくのか、地域の方々と一緒になって、技術力を生かした的確な公共物の管理に携わせていただければと思っている。なかなか私たちだけの人材では厳しい部分もあるため、地域の方々、それから県民の方々、市民の方々のご協力を活かし、コーディネートしながら活動したいと思っているが、今回は試験的に坪井川について、手本やシンボルとなるような作業を進めていきたいと思っている。

(M-2) はなももの会

【事業名】 はなももの会による社会福祉生活支援活動推進事業

<質疑応答>

- ・(越地委員) 会の目的に社会福祉生活支援というのが明確に謳ってあるが、今回の事業とこの社会福祉支援の繋がりはどうのように受け止められるのか。

(団体) もともと身近なところで、地域の弱者の方であるお年寄りや小さな子どもたちの困りごとをいろんなことでお手伝いしたいということで始めたが、そのお手伝いをするにも人手がいるため、私たちの活動に協賛していただく、理解していただく方を募るという意味もありこのイベントを催している。それとともに、活動に参加していただいた方に対するお礼の意味も込めて、お楽しみといった

目的も込めてこのイベントを続けていこうとみんなで一生懸命頑張っている。

- ・(越地委員) となると、本来の目的の基礎を作るための一つの手立てという感じもするが、本来の活動はどのようなものか。

(団体) 本来の活動は、地域のなかでいろんなゴミが出せなかったりされる方の資源物回収を行ったりしている。それに伴い、トラックを借り、ガソリン代を使って活動するが、ボランティアなのでなかなか経費的などころは出せないため、そういった資源物を回収させていただいた分の収益に関しては、それを細やかな収入として手伝っていただいた方々にガソリン代を差し上げるという形で循環している。

また、将来的には、お年寄りの安否確認や、地域の子どもたちと色々なお年寄りとの繋がりを作りたいという思いがあり、私たちの目的は、私たちが小さいときにあったような、地域のお年寄りと子どもたちが仲良くなり、私たちが育ててくれたような優しい街にもう一回返したいという意識があって始めた会だった。

- ・(佐藤副委員長) 手元の資料に、前回の春祭りと秋祭りのチラシをいただいているが、今年も大体同じような内容を考えているのか。

(団体) 今回は福祉活動をされているNPOを呼んで紹介させていただいたり、今まで出来なかったところではフードドライブといったことなど、少しずつ内容を充実させたいと思っている。

- ・(佐藤副委員長) 今回の事業は市民ための公益活動であり、NPOとしてやっている活動をより一般の市民の方々に広めていくにはどうしたらいいのかということが一番大きなところ。そういった意味では、会場がまた同じフードパルだが、広く市民に知らしめることについて、会場を他の場所にせず、フードパルにしたのはなぜなのか。

(団体) 沢山の人来ていただくには駐車場の関係があるため、フードパルが一番その心配しなくてもいいということが理由のひとつ。それと、フードパルというと熊本ではご存知の方が多いので、そういう知名度もある。

また、場所をあまりあちこちに変えるとかえって分かりにくいのではということもあり、しばらくはフードパルを使っていきたいと考えている。知名度が上がったらいろんなところで定期的実施していきたいと思う。

- ・(中島委員) 廃品回収をされているが、はなももの会の拠点、活動場所はどこを中心にされているのか。また、地域にはいろんな福祉団体や社協などがあるが、そういったところとの連携はどうされているのか。

(団体) 廃品回収の場所は熊本市全域で、会員の周りの方たちに声をかけていただいて、そこから回収をする。西部、北部、南部や東部の方にも会員がいるので、これまでそういった会員がいるところを中心に回らせていただいている。

- ・(中島委員) 市内全域を回って廃品回収をしていることが、毎週されている活動ということか。

(団体) それと清掃活動がある。公園の清掃をやらせていただいているが、場所を特定しているわけではなくて、会員からここはどうかと声掛けしていただければそこに伺う。

- ・(中島委員) それでは、これから会員を増やしていくことを目的としていると。

(団体) そのとおり。

- ・(古賀委員長) 今は任意団体だが、今後法人化を目指しているだとか、事業の発展のためにそういった議論なり検討というのはあるか。

(団体) 平成 26 年に発足して 2 年目に入り、丸 1 年半経過したばかりなので、会員の数がもう少し増えればいろんな活動ができるが、まだまだ小さな会でこれからどんどん認知度を高めていきたいというところ。その過程で必要性が出てきたときには、みんなで話して考えたい。

先ほど言い忘れたが、はなももの会はあいぽーとに利用者登録させていただいており、市の活動などいろんなことを一緒に取り組んでいきたいと考えている。

(5) 生涯学習・子どもの健全育成の分野

(S-1) ボランティアグループ「熊本のおもちゃ病院」

【事業名】おもちゃドクター養成講座

<質疑応答>

- ・(古賀委員長) スタートアップ等の助成を活用して実際に成果を出していることについて、お礼を申し上げたい。おもちゃ病院の入院患者が増えていることの需要について、増加している背景についてはどのように考えているか。

(団体) 私たちの世代はおもちゃを自分たちで作って遊ぶことも多かったが、最近はいろんなかたちのおもちゃが使い捨てのようになっている。そういう中で、もっとおもちゃを大事にしたいと思っている人が、私たちがおもちゃを預かったときに「こういう場所があってよかった」と言われる。本当は使いたい、修理ができないしわからない、そういった人からの需要が非常に多くなっている。

同時に、修理をする側にも、例えば私は定年まで技術屋として仕事をしてきたが、そういった技術を今度は職業としてではなく、自分の余暇の中で活かしていくことができれば、こんなにやりがいがあるものはないと皆さんおっしゃっている。すごく素敵な、立派なボランティア活動をしているのだが、ボランティアというよりも自分の趣味を楽しむ感覚で取り組んでいる。そのことで、自分も楽しみ、修理することで子どもも喜び、母親にも喜んでいただく。それがまたおもちゃを修理した達成感と繋がって、多くの人に取り組んでいただいていると思う。これまでの熊本では、それが非常に少なかったということではないかと思う。

今年 1 年間で、熊日の朝刊、夕刊、NHK、ラジオなどのメディアに取り上げていただいた。それで認知度が上がったことも非常に大きかったと思う。

- ・(越地委員) 入院患者に対して医者が足りないということで、医者をどんどん増やしても追いつかないくらいだと思うが、ならばこういう講座をもっと計画されてもいいのではないかと。しかも、医者側からすれば高齢社会の一つの生き方でもある。こう言うのは失礼だが、この程度しか開催できないのは資金の問題なのか。

(団体) おもちゃドクターの養成講座は、ほとんど東京で開かれている。おもちゃ美術館というところがあり、そこにある全国のおもちゃ病院協会の事務局が年 2 回ほど開催している。その他、地方では社会福祉協議会がおもちゃ病院協会とタイアップして公的な取り組みとしてやっている。実は 4 年前のスタートアップ助成を受ける前に 同じようにこの講座をお願いし、それ以前にも社会福祉協議会に問い合わせしたが、そういった資金面で、予算も非常にかかり実施できなかったという例がある。そういう点では、公共団体の方でやっていただければもっとドクターも増えていくのではないかと考えている。

- ・(中島委員) おもちゃ直してもらって、親御さんがすごく喜んでおられるということは、とてもありがたいことだと思う。そういった人材を増やすことと、おもちゃを直してあげた場合の対価というものは、ほとんどボランティアとして無料でされているのか。

(団体) 修理自体はそんなに費用が掛かるものではない。おもちゃ自体が 2,000 円とか 3,000 円のものであるため、例えばスピーカーを修理すると 200 円とか、スイッチ 1 個の修理などで、なかには費用が 30 円というものもある。修理にかかる費用については実費をいただき、そこへ取り組む技術的なものについては、自分が今まで培った技術だとか知識を活かし、お役に立てるということで費用はいただいている。なかには、本当にありがたうと言って、いろんなお菓子だとかを持ってこられることもある。場所によってはそういうことがないように初診の 100 円だけいただくというところもあるようだが、うちの病院では一切初診料をいただけてない。もともと日本おもちゃ病院協会のキャッチフレーズが「報酬は子供の笑顔のおもちゃ病院」であるため、その趣旨でやっている。

(S-2) NPO法人 テアトロ・リリカ

【事業名】テアトロ・リリカ熊本 2016 創立 20 周年記念オペラ『蝶々婦人』(全幕・伊語上演)
～青少年オペラ体験ワークショップ～

<質疑応答>

- ・(佐藤副委員長) オペラであるため、非常に事業規模も予算額も大きいですが、当基金は一つの採択規模が小さい。その他の補助金、助成金を受けていないとあるが、例えば熊本ファンド 21 など、こういった文化活動に対する支援は利用していないのか。

(団体) 熊本ファンド 21 にも是非お願いしたいが、前回の公演に助成をいただけており、何年か置かないと助成申請できない。また、今回は県劇にも舞台芸術の助成金を申し込んだが、そちらでは無理だったので、こちらの助成に頼ることにした。

- ・(古賀委員長) 少し厳しい言い方で申し訳ないが、助成希望額 39 万円というのは、応募された中では一番大きな金額。この事業費 838 万円の中で、市民の貢献である寄附からなる 39 万円がどういったかたちで活かされるのかについての考えを教えて欲しい。

(団体) 子供たちの衣装やレッスン費、ヘアメイク、楽譜代など、そういうものすべて子供たちに負担させていない。そして、危険も伴うということで保険などもこちらの方で掛けているため、そういう意味では、この 39 万円は青少年ワークショップに係る費用、子供たちだけに係る費用だと認識している。

なるべくお金がかからないように、最小限のなかでいいものができるように努力している。大人の自分たちは金銭を負担できるが、子どもたちには全くそういったことを気にせずに、いろんなことを体験して、芸術の素晴らしさを知っていただけたらと思い活動している。

- ・(古賀委員長) 例年この事業に集まってくる青少年あるいは子どもたちは、どういった背景を持った子どもたちが多いのか。

(団体) 私は高校で音楽の講師をしていたが、そのときいろんな家庭の事情や悩みを抱えている子どもたちに「これまで生きてきて、何かやってきてよかったことはあるか」と聞くと「別にない」という答えが返ってきた。みんなで何かをつくることをしてきた生徒が少なかったため、そういう子どもたちを集めてオペラの体験をさせたところ、舞台美術や照明の担当者がとても厳しかったりと、当団体のメンバーは小学生から 80 代までいるが、核家族になりがちな現在、家庭的な温かさの中で優しさと厳しさを学んでくれて、「今後社会人になってもやっていけそうです」という言葉をもらったりした。また、学校の先生が不登校の生徒を預けられることが多いので、その生徒たちが活動に接しているうちに学校にも通うようになり、本当に立派な学校に進学し、今大学の教授を目指している子やその専門で頑張っている生徒がたくさんいるので、学校の先生方にも喜ばれ「あそこに行けばいいよ」と認められてきている。

(S-3) 特定非営利活動法人 くまもと学習支援ネットワーク

【事業名】「手軽で栄養があり幸せになれる料理作り」事業 ～親子料理教室～

<質疑応答>

- ・(佐藤副委員長) 総事業費が 24 万 2200 円だが、そのうち助成希望額が 16 万と 6 割を超えている。通常でいうと大体 3 分の 2 くらいが平均だと思うが、もしもこの 16 万の助成が出来なかった場合は、この事業そのものが出来ないということになるのか。

(団体) 助成金が厳しかった場合でも法人としては少しずつでも実施したいと考えている。それから、助成金額が 60%を超えていることに関しては、他の助成申請においても大体 50%から 60%くらいの割合で申請をしてきたもので、その習慣で今回も 60%くらいでの申請だった。

- ・(中島委員) 「食」は本当に大事だと思う。食材費が参加者の自己負担ではなく、予算の中に組み込まれている。食材に関しては自己負担になる場合が多いと思うが、そこはどのような考えだったのか。

(団体) ひとり親家庭ということで、金銭的な負担がなるべく少ない方がいいのではとの思いがある。また、ひとり 100 円とした方が集まりやすいのかなと、事業を始めるにあたって、まずそのハードルは低くしたいとの思いがあった。そのため、食材費がかなりの割合になっている。

- ・(古賀委員長) 主要な対象がひとり親世帯ということだが、ひとり親世帯に対するアプローチ、声を掛けていくためのルートはあるのか。

(団体) ひとり親家庭の方に対しては、日頃より熊本県の母子会と勉強しながらやってきた。そのため、今回の学習会についても、声掛けはかなりの広がりがあるかと思う。ただ、母子会等に入られてないところにも宣伝はしたいと思っているので、また別に宣伝費というのにも計上している。

- ・(古賀委員長) 熊本市の母子寡婦会とも連携があるということか。

(団体) 熊本県自体に熊本市も入っているので、熊本県の母子会のみ連携している。

(S-4) 新老人の会

【事業名】 演劇「秘聞・一心行の大桜」の上演

<質疑応答>

- ・(越地委員) 観覧無料とあったが、これは学生が無料で、一般の人が有料ということか。

(団体) 全部無料である。

- ・(越地委員) 自己資金 128 万はこれまでの蓄積であり、今回のチケット代ではないということか。また、演じるのは貴団体のメンバーが中心かと思うが、いろんな世代の人にこの伝統を引き継いでいきたい、特に若者にとという狙いをどの程度どうやって呼び込んでいくのか。

(団体) まず、幼稚園の子どもたちが約 150 人コーラスとして出演する。すると、当然その親も参加する。それからこのチラシを高校、大学にも配っている。また、日曜日のため、小学校が学校行事として取り組み、全員参加として月曜日を代休にしようと言ってくれたところもある。

- ・(古賀委員長) 熊本の歴史のなかで様々な演目、題材があると思うが、一心行の大桜のどこに注目したか、なぜ演目として採用したのか積極的な理由はあるか。

(団体) この演目での公演は、今回で 3 回目になる。終戦 70 周年になり、我々の世代はみんな戦争を知っている世代のため、戦争がいかなるものであるかということ、この大桜を通して伝えたい。戦国時代とはいえ、父と子が 450 年前に別れなければならなかった無情の姿、これを演じて語ろうというもの。450 年育てるというのはそう簡単なことではなく、親子世代から子々孫々までこれを守り育てるということ、大自然の中で育てるという自然環境を守るということを伝えたい。

そして我々は平均年齢 80 歳ほどで、中には 88 歳くらいの者がいるが、そういった高齢者が参加して

生きがいを持ってやっていく。全国にも高齢者が自分たちで計画して実行しているものは、まずないと思っている。

この台本は、8年前に鳩野宗巴の演劇をやった時にもうすでに出来上がっており、そのときに前副代表だった徳永先生から台本を見せられ、これは絶対に皆さんに教えなければいけないと思い上演の約束をした。それが8年後になってやっと日の目を見たというもの。

- ・(佐藤副委員長) 当基金は事業の継続性についても考えていくが、貴団体として次年度以降どのような活動を計画しているのか。

(団体) 当団体は全国規模で活動しているため、毎年公演をすると荷が重いですが、3年に1回はやろうとしている。今回で3回目と言ったが、今でちょうど10年目になる。また、演劇をすることに関しては、自分の先輩であり尊敬する先生が「お説教するよりも演劇をやれ」、つまり人々を感動させて人を動かすことが大事だとして、演劇は非常に大事なものだと思っている。

他にもいろんな事業を展開しており、例えば、熊本市の近くに千本のさくらを植えようというものがある。当団体は300人いるが、まずお金を出すというより、知恵のあるものは知恵を出せ、時間があるものは時間を出せ、労力があるものは労力を出せとしている。先程の質問で自己資金が130万と言ったが、あれは会員が出し合っているもので、今回も足らなければ出さなければならない。

(S-5) 特定非営利活動法人 子ども夢工房

【事業名】親子でつくる「親守詩(おやもりうた)」と日本の伝統文化にふれる「五色百人一首」の事業

<質疑応答>

- ・(佐藤副委員長) 事業の内容はよく理解できたが、事業収支計画書にある県大会のスタッフ旅費40名、熊本市の大会の20名、このスタッフは貴団体のスタッフのことか。

(団体) そのとおり。

- ・(佐藤副委員長) 貴団体のスタッフは40名いるのか。

(団体) それ以上いる。熊本県下から集めて、熊本市の場合約20名、県下全域にしますと50、60人いる。遠くは天草、人吉、球磨のものもいるが、職業柄土日しか動けず、それぞれの活動があり休みが取れない場合もあるが、全体から集めるとそのくらいの人数になる。

- ・(佐藤副委員長) 助成希望額が18万円であり、総事業費30万円からすると約6割になる。もしこの助成希望額が交付されなかった場合、事業計画はどうなるのか。

(団体) すべて自己負担になる。また、地域の商店から協賛をいただき、表彰状、トロフィーなどを広告の形で協力いただく。そういった工夫により何とかやっていきたい。

- ・(越地委員) 親守詩は、全国的にどのくらい普及しているのか。また、そのスタートがもともとどんなのか。もう一点が、読書感想文や俳句などいろんな取り組みがあるなかで、子どもたちにこれを普及させていくのは簡単なことではないと思うが、どういった工夫や努力をされていくのか。

(団体) 親守詩は 5,6 年前に始まったもので、熊本県では、確か県の国会議員等が条例を作り、その一環の取り組みだったかと思う。現在は全国に広まり、全国大会まで開催できるほどになった。

普及については、いまのところ公募という形をとっているが各教育委員会にお願いし各学校にチラシを配布させていただくようにしているため、今年は 2,000 首ほど集まった。昨年は 5,600 首だったので、かなりの数広がっていると思う。

また、合志市では市全体の事業として取り組んでおり、合志市長賞というものもありホームページに親守詩が掲載されている。そのため、市町村によっては公的に扱うところもあるため、今後ますます広がっていくと思われる。この取り組みは、ご覧になって読んでいただだけでもわかるとおり、心温まる句ばかりであり、全県的、全国的に広げていかなければならない活動だと思う。

- ・(田中委員) 第 4 回の親守詩県大会とあるが、これは年に一回か。

(団体) そのとおり。

- ・(田中委員) 百人一首の熊本市大会とあるが、全県一連の活動をしている中の熊本市部分だけを今回事業申請されているということか。そして県大会についても、熊本市で開催されるため、事業の申請がなされているということ。

(団体) そのとおり。

- ・(古賀委員長) 当基金は熊本市にかかる地域の課題解決のための提案募集といった趣旨があるが、代表大会が熊本市開催だから対象になるかという点、必ずしもそうではない。熊本県大会を当助成事業で開催することの積極的な意義、また熊本市のためとなる事業計画になっているかについて説明いただきたい。

(団体) 昨年度は山鹿で開催したため、助成事業から除外して申請していた。今年度事業に含めているのは、熊本市の参加児童が多い割合を占めており、例えば 2,000 首のうちの 1,000 首近く、40%ほどは熊本市からの応募だった。そのため、今年度はもっと熊本市へこの取り組みが広がっていくはずと見越しての理由と、会場が熊本市であるから。昨年度は会場が山鹿市だったため、前述の状況ではあったが当団体の判断として申請に含めなかった。県にも助成申請をしたいが、そういった枠がないという現状である。

- ・(中島委員) 事業の中に「伝統文化教室」が入っている。これを熊本市内の学童保育で実施するとあるが、具体的に、実際に学童保育内で実施できるのか、または対象の保護者の方にどのようにお知らせするのか。

(団体) 学童保育は学校教育ではなく、厚生労働省管轄の社会教育のため、教員の手が入らない。そのため、管理者がいなため子どもたちに指示が通らず、野放しになっているのが問題となっている。

そこで、私たち教員が土日などの休日を使って、月に1回程度、理科教師であれば理科に関することや、百人一首、ペーパーチャレランというゲームをしながら規律を考えるといったことを指導している。その方法を学童指導の先生方に見ていただき、次に活かせるようにしている。

・(中島委員) 具体的に「伝統文化教室」についてお聞きしたい。まず、学童保育は市の青少年育成課の管轄にある。申請書をみると、当事業では20回行かれるようであり、現在も実際に指導を行っているとのことだが、具体的にどこに行っているのか。

・(団体) 植木町の学童保育の方から要望があり、そこに行っている。これから対象学校を広げていくことは可能だと思いが、要望があったところだけでいきたいと思っている。

伝統文化教室についてだが、百人一首をすると落ち着くという効果がある。全員正座をして始めるため、しんとした中で進めることが出来る。その静寂さに対する勉強になるということと、聞き耳を立てないと読んだ内容が聞こえないため、そこでまたルールを指導していく。そうするとだんだんと落ち着いて、次からは学童保育の指導者の方が読まれても集中できるようになる。

ここではお金を頂いていないが、牛深の方で先導してやった例があり、そこで大成功して、今は指導者の先生だけで実施し、そこに当団体の者がたまに行くというかたちがとられている。それを目指している。

6 総評(市民公益活動支援基金運営委員会 古賀委員長)

例年どおり、たくさんのご提案をいただき、厚くお礼を申し上げます。

このくまもと・わくわく基金そのものが何を目的にしているかということ、一言で言うならば、地域の課題を市民協働の手法で解決、改善していくということである。そういった意味では、それぞれの法人が地域の課題をどう認識されているのか。そのあたりが私自身にとっても非常に関心のあるところであった。それについては、昨年に引き続き、子どもに関心のある事業が半分ぐらいかということだが、次の世代を担う子どもたちに私たちの世代ができること、あるいは、いましなければいけないこと、こういったことがミッションとして提案されたプレゼンテーションになったかと思う。

もう一つ、今年度の例年にない特徴としては、活動開始が平成25年くらいからの比較的若い団体が半分程を占めたことが挙げられる。これまで、市民活動を始めることは非常にハードルが高かったのだが、そういった意味では、新しい団体が自分たちで地域の課題を解決しようという気持ちがあったときに活動に入っていくやすい環境を整えることができたのではないかと非常に嬉しく思う。

ただ、質疑応答の際などに、責任者という立場上厳しいことも申し上げたが、このくまもと・わくわく基金は、不特定多数の方からいただく募金と違って、きちんとどういった人が寄附をしたか、市民の名前、あるいは企業等の名前がわかる寄附で成り立っている。そのため、そういった寄附した方の顔が見え、どういった思いで寄附をされたのか。それをしっかりと受け継ぐために、地域に貢献したいという市民の思いをそれぞれの団体の方は十分に理解されているのかという趣旨で質問をさせていただいた。そういった意味では、今後ますます寄附というものの自体の拡充を図るとともに、それを受けて採択された事業が熊本市の地域問題を市民協働で解決するツールとしてより有効なものであるということを示していくことができれば、寄附額の上昇に繋がるのではないかという思いがある。

本日、早朝からずっと審査にあたられた運営委員の皆様にお礼を申し上げますとともに、この助成が採択された場合、それぞれの団体の方には事業報告あるいは収支報告をしっかりとお願いしたいということ

お伝えいたして、総評とする。本日はどうもありがとうございました。

(終 了)